



学校だより



令和4年9月30日
10月号
調布市立第一小学校
校長 川島 隆宏

<http://www.chofu-schools.jp/chofu-1sho/>

TEL042(481)7636

褒める 認める

副校長 飯島 慶裕

9月の3連休では、台風14号・15号と続けて日本に上陸し、各地に被害をもたらしました。6年の日光移動教室では、台風14号の影響を受け、予定していた内容を変更したり、中止したりしましたが、3日間の行程を無事終えることができました。日光移動教室の様子を一小ホームページ「学校生活」に掲載しておりますので、御覧ください。なお、9月27日の6校時、校庭に赤いコーンを置いて炎に見立て、日光でできなかったキャンプファイヤーを行いました。火の神や火の精が登場しての炎の分火、ダンス、ゲームなどを行い、思い出を増やしました。



ところで、令和4年度も半年が過ぎました。授業中、校舎内を歩いていると、どの学級でも落ち着いて学習に取り組んでいる様子がうかがえます。子供たちは、私の姿を見ると、手を振ったり頭を下げて挨拶したりしますので、学習の邪魔にならないよう、静かに見るようにしています。そのとき、先生たちの言葉に耳を傾けると、「すごいね」「頑張っているね」「すてき」「いい考えだ」「それいいね」など、たくさんの褒めことばが聞かれ、私にも言われている気がして、「よし、頑張ろう」と思ってしまう。

子供を「褒めて育てる」ということは以前から言われていますが、同じ褒め言葉でも、使い方によっては逆効果になってしまうこともあります。例えば、「100点を取ったの。よくがんばったね。」「100点を取ったの。毎日よく勉強して頑張ったね。」という言葉と比べて、子供たちはどう受け止めるでしょうか。どちらも褒めているので子供たちはうれしく感じるでしょうが、最初の言葉は、「100点を取ったから」という結果に対して褒めているのに対して、次の言葉は、100点をとるために努力した過程を褒めています。結果だけ褒めていると、「100点以外では認めてもらえない」と感じるようになり、不満足な結果のときは、隠したり、うそをついたりするようになってしまうかもしれません。また、100点が取れないと、自信を失って挑戦することを避けるようになる場合もあります。

褒めようとするとしても結果に目が行きがちになり、「自分の子には褒めるところがない」ということになってしまいます。学校の先生たちは、「努力したね」「最後までがんばったね」という言葉をよく使います。そこに至るまでの一人一人の取組を大切にしたいと考えて出る言葉です。御家庭でも、ぜひお子さんに「認める」言葉掛けをしてみてください。そして、子供の存在そのものを認める「いてくれるだけでうれしい」ということも伝えてください。得意なこと苦手なこともある自分を「大切な存在だ」と感じられれば、困難なことがあっても前向きに取り組む、他者への思いやりの心も育っていきます。

今年度の後半も、子供たちの健やかな成長を願い、全教職員で協力して教育活動に取り組んでまいりますので、御協力をお願いいたします。

10月の生活目標 **すすんで仕事をしよう**

学校では、いろいろな人が力を合わせながら働いています。教員はもちろん、子供たちの登校前にモップがけをしている用務主事、給食のメニューを考える栄養士、給食を調理する調理員、皆が使っているものをそろえる事務主事、学校の安全を見守る校舎管理補助員など様々です。

協力しながら働くことの良さに気付かせ、子供たちに、すすんで仕事をする大切さや喜びを理解させたいと思います。みんなのために役立つ仕事を積極的に行うことのできる子供であってほしいと思います。